

---

# 自称奇人と他称狂人

ゆのみん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自称奇人と他称狂人

### 【Nコード】

N9680Y

### 【作者名】

ゆのみん

### 【あらすじ】

奇人を自称する男の子と、狂っているとされる女の子の日常のお話。『普通』から外れた二つの歯車は、何故か噛み合っ

FC2小説に投稿したものを転載。

2008年夏頃の作品。

他人に見せられる中では最古の作品でしょうか。

まともに書き上げた作品では第二作品目です。

僕は信号待ちの時にはいつも逆立ちをする。

理由なんかない。ただ、そうしたいから、そうする。

僕は、どうやらそんな人間のようにだった。

「はあ」

疲れたような溜息が聞こえる。

それを聞くと彼女だと解るのは、もうその溜息を聞き慣れたからだろう。

だから僕は、その次に聞こえる言葉も知っていた。

「また、死ねなかつたなあ」

「また、死ななかつたな」

そう言つて適当に返す自分は、交差点で逆立ちのまま。

ちなみに、彼女はさっき唐突に交差点に飛び込んで、車に撥ねられて右腕を折つて戻つてきたばかりだった。

相変わらず変な子だった。

\*

僕と彼女が出会つたのは高校一年生の春。

同じクラスだった。

だが、彼女は背景に溶け込んでいて、これといった印象は無かつた。

でも、しばらくしてから、彼女はどうやら僕のような『普通でない』人間のようだと気付いた。

彼女はどつというわけか、死ぬような目に遭いたがる子だった。

初めて互いを意識したのは、六月のある日。

僕が世の中に言う『普通』でないと気付いたやつらが、僕の上履きの中に山ほどの画鋏を入れていた時だった。

たまたま一緒の時間に登校して来ていた彼女は、靴箱を開けて固まっていた。

それを見て、気になって覗いてみたら、僕の靴箱と同じように山ほどの画鋏が入っていた。

彼女が僕に気付き、それから僕の上履きに気付いた時に、彼女がぼつりと呟いた。

「おそろいだね」

普段と変わらず無表情のまま。でも、その声は少しだけ楽しそうに聞こえた。

「うん、おそろいだ」

だから僕は、何も考えずにそう返した。

その日の朝は、二人でホームルームをサボリ、その大量の画鋏を使って見事な猫の絵を掲示板に描き上げた。

互いに言葉は無く、でも完成したとき、つまらなさそうに、でも、少しだけ楽しそうに、彼女が笑った。

だから僕も、愛想笑いを返した。

笑い方なんて、それしか知らなかったから。

ある日、彼女の教科書がズタズタにされていたときには、彼女は何も言わず、つまらなさそうにそれをゴミ箱に放り捨てると、ふらりと窓の外に飛び降りた。

僕らの教室は三階だった。

次の日、彼女は普段どおりの無表情で右足を引きずっていた。

僕がなんとなく授業を放り出して屋上でUFOを眺めていた日。学校に戻ったら、彼女が手首から血をぼたぼた垂れ流していた。

死ねと言われて本当に死のうとしたらしい。  
おかしな子だった。

「首でも吊れば？」

死のうとするのに、曖昧な方法ばかり採る彼女に、僕は一度そう  
言ったことがある。

「そうすればすぐ死ねるよ？」

その言葉に彼女は、うーん、と考え込み、  
「だから、かな」

死ぬと解ってる方法じゃ、試す価値も無いような気がするから。  
そう、苦笑いに似た表情で答えた。

不思議な子だった。

……でも、何だかその気持ちは、解らなくもない気がした。  
そして、今日も彼女は曖昧に自分を痛めつけている。

「狂ってる」

そんな彼女の評価を聞いたことがある。

その通りだと、そう思った。  
でも、少し違うような気もした。

班分けでも二人はいつも一緒だった。

というより、自然に二人だけが残っていた。

最初はもう一人、友達を作るのが苦手そうな子が一緒だったが、  
すぐに他に友達を作ったらしく僕らから離れていった。

きつと、僕と彼女と組むのが怖くなったんだろう。

僕が綺麗な風景に吸い込まれて滝の上から飛び降りたり、死ぬる  
かなと思って続いて飛び降りた彼女。

せつかくだからとサファリパークのシマウマと会話を始めた僕を  
尻目に、ライオンに食べられかけていた彼女。

誰も僕らの傍には居なくて、そんな僕らの思いもいつもバラバラで、それでも僕らは一緒だった。

\*

「君は死なないよ」

僕は自然にそう口を動かしていた。

「キミが守ってるから？」

応える彼女は、折れた腕をブランと垂れ下げたまま、何故だかそう問い返した。

「そうだね」

当然の様にそう答えた僕は、何も解っていない。

「……きつと、そうなんだろうね」

でも、もしかしたらそれが真実なのかもしれない。いつも一緒に彼女を見て、ぼんやりとそう思った。

今朝の上履きは、七色だった。

もう少し具体的に言うならば、様々な着色料に彩られたガムが、これでもかと言うほどへばりついていていた。

まさに山ほど。

「……綺麗だねえ」

口から零れ落ちた僕の声は、どこか他人事のようにだった。

「これ、何のガムだと思う？」

彼女が上履きにへばりついたものの一部を指差して、僕に問いかけた。

「レモンじゃないか？」

その毒々しいまでに鮮やかな黄色を見て、適当に応える僕。

その間に自分のプリズムカラーの上履きは近くのゴミ箱に放り投げしておく。

「レモンかぁ……」

そう言いながら彼女も続けて玉虫色の上履きをゴミ箱に投げ捨てる。

その日は何故か放課後まで、二人揃って靴下だけで過ごした。帰りに購買部で、二人一緒に上履きを買った。

前回の購入から一週間。最短記録だった。

\*

次の日、逆立ちしても彼女は現れなかった。

側転のまま登校してみても、声を掛けられなかった。

昨日一緒に購入した彼女の上履きは、下駄箱に入れっぱなしだった。

そのまま一日が始まり、何もないうまま終わった。

彼女が、意識不明で病院に運ばれたというニュースは届いたが。

\*

その次の日、何故か自分は学校に居なかった。

「お祖母ちゃんに逢えた」

と、珍しく上機嫌な彼女の横で、僕は病室の机に頬杖をついていた。

彼女は商店街の真ん中で、レモンガムを喉に詰まらせて前のめりに倒れたらしい。

相変わらずおかしな子だな、と思う前に、

「顔が痛かった」と、そんな風に笑う彼女を見て、ふと思った。

こんな風に笑う子だったかな、と。

ぼんやりと病室の外を見ながら耳を傾けると、

三途の川の渡し賃を忘れていったから渡れなかった、とか。

たまたま向こう岸に居たお祖母ちゃんがわざわざ会いに来てくれ

た、とか。

本物の鬼を相手に鬼ごっこをやってきた、とか。彼女の口から、本当に楽しそうに語られる臨死体験を、ぼんやりと聞いていた。

その日一日中、ずっとそうしていたのは。

そして、そんな一日を悪くない、と思ったのは。

やはり僕が『普通じゃない』からだろうか。

一日の検査入院の後退院した彼女に、僕はレモンガムを渡した。

彼女が喉につめたものとは違うメーカーのレモンガム。

彼女はそれを見て、きよとんとした後、大笑いした。

僕も、釣られて笑っていた。

自然に零れたそれは、何故か愛想笑いではなかった。

買ってきたばかりのガムを、今度は喉に詰まらせずに二人で食べた。

「おいしいよ」

そう言った彼女の顔は、嬉しそうだった。

それを見た僕も、嬉しいような気がした。

口の中に広がる味は、甘酸っぱいレモン味だった。

\*

今日も彼女は傷つくために生きて、

今日も僕は気の向くままに生きている。

二人が向いているのは全然別の方向で。

見える景色もぜんぜん違う。

僕は、そんな彼女を理解できない。

彼女も、そんな僕を理解できない。

それでも何故か二人はいつも一緒で。

背中合わせのまま手が触れ合い、

手を離せば視線を交わして、

顔を逸らして別々の道を歩きながら、互いの声を聞き、

ふと、気付けばまた手が触れ合っている。

そうやって、『普通じゃない』二人の歯車は、

今日もまた、ズレたまま噛み合っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9680y/>

---

自称奇人と他称狂人

2011年11月29日01時57分発行